MATRIX

No. 44

海上交通システム研究会ニューズレター

Newsletter of Marine Traffic System Forum

２００４年新年号　　目　次

1）新年エッセイ

・「構造改革」と「技術革新」　会長　原　　潔
・私の山岳レース　在田　正義
・ＭＴＳ研究会で人間ウオッチング　江藤　寛子
・アオサ大量発生被害の現状と有効利用の可能性について　大塚　耕司
・新年のご挨拶　大橋　康人
・不審船沈没事件について　岡本　洋
・広い海　齋藤　了文
・Orange　Boatの思い出　柴田　康彦
・海洋国家論議に思う　城野　隆史
・深日(フケ)港再開発に対する一提言
　テクノスーパーライナー発着基地としての活用　田中藤八郎
・造船技術・技能の伝承と保存　田淵　文雄
・日本の形・日本人の型を考える　寺田　政信
・新春雑感　日本の技術力　長尾　實三
・ＣＲＭとは何か？　廣澤　明
・新年ご挨拶：近況報告　星野　裕志
・海辺のゴミ　宮脇　正明
・ＭＴＳ研究会への願い事　山村晋一郎

2）第８０回例会概要（１５周年記念　平成１５年１２月３日）　村上　馨
　記念講演会資料　造船産業競争力強化に貢献する研究開発　中西　堯二

3）会報

ＰＲ　「船と海のサイエンス」第６号秋季号　（独）海上技術安全研究所
（紹介）神戸商船大学は神戸大学海事科学部となりました　神戸大学　西川　榮一

広い海

関西大学　齊藤了文

海は広いな大きいな、月は登るし日は沈む
海にお船を浮かばせて、行ってみたいなよその国

コモンズの悲劇という話がある。誰でも使える共有地（コモンズ）が、放牧を許された牧場だったとしよう。そのとき、その牧場に馬を数頭放せば、馬は牧草を食べて育ち、母馬は子馬を生むこともある。牧場が広ければ、これらの馬は牧草をいくら食べても、また生えてくる。馬の糞はある種の栄養分として役立つかもしれない。これだけなら、平和な状態であり、悲劇はどこにもない。

しかし、誰もが使える共有地があれば、そこに馬を放牧したい人は増えるだろう。別の人は10頭も馬を放牧しようとするかもしれない。また別の人は、それ以上に馬を放牧しようとする。多く放牧すればするほど、得になるとすると、誰もが我勝ちに放牧を始めるだろう。

すると、ある限度以上、馬が放牧されると、牧草が成長するよりも早く食い尽くされてしまうことになる。このときが悲劇である。全ての人が自分の得になるように行動した。その結果、ある時点で全ての馬が餓死するという悲劇になったのだ。

このコモンズの悲劇は、環境問題で使われるテーマになっている。共有地、コモンズを空気、水で置き換え、工場からの煤煙の排出を馬の放牧と置き換えると問題が明らかになる。この場合、一つの解決策としては、共有地を私有地化して、土地の利益を主張すると、土地の使用にコストがかかることになる。こうなれば、牧場の草の乱獲も収まることになる。自分勝手な放牧も抑えられることになる。環境問題では、CO_2 の排出量に応じて課金するようなシステムである。

公海の扱いは、広い海だと思われていた時代は、コモンズであった。しかし、現在は環境を汚染することが少しでもあれば、問題として取り上げられることもある。公海は領海にも影響する問題を含むものとされる。つまり、公海は、多くの国に関与する私的所有に近いものとなった。一国の利害でなく世界的ルールを作らないと、資源が使い尽くされる。

さて、資源の問題と少し違うのが、難破した船を助ける問題だ。本国では救出できないために他国の船に頼むしかない状況がある。これは国法を超えた協力の問題である。タイタニックの難破時に、近くにいて救難をしなかったロード船長は後々非難された。

昔、ローマ帝国のある皇帝が「朕すなわち陸法の主、海法すなわち海上の王」と言ったことがあるそうだ。つまり、海上貿易は多くの国家の規則に関係しているために、海商法のみがそれを規制することができ、ローマ帝国という強大な権力を背景にもった法律さえも、それに影響を与えることはできないというものだ。

広い海は人々の連携を要請する。もしくは、人間の単純なコントロールを超えている。